
縁切 ~エンキリ~

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縁切～エンキリ～

【Zコード】

Z4691D

【作者名】

雨月

【あらすじ】

エンキリはその昔、ナウマン像を狩っていた時代から存在してい
た……そんなエンキリ一族の末裔である一人の少年が成長してい
く？物語。

プロローグ／第一話　自由を求めるHンキリ（前書き）

たんぽぽさん、感想ありがとうござります。連載開始となりましたこの小説、皆さんも出来ましたら応援してください。はじめはちょっとあれですが末永く読んで欲しいと思います。

プロローグ／第一話　自由を求めるHンキリ

プロローグ

駅前に長旅の疲れを発散するように一人の少年があぐびをした。高校生ぐらいだろうか？最近の若者にしては珍しく黒髪で短髪だ。目は切れ長でどこなく鋭い印象を受けるが、和やかな雰囲気を持っているという感じでミスマッチだった。

「ん～～～ひつさしぶりだな」

背中に背負っているのは彼の最低限の身の回りの道具だ。既に必要な道具は彼の自宅に送られているだろ？……

田の前に広がるのは田舎と都会のちょうど真ん中ほどの賑わいを見せる街だった。少年が背負っている唐草模様の竹刀袋を見ると剣道部に所属していると思われるに違いない。

「さて、いくとするかな…………」

少年は歩き出した。

一、

「ただいま！」

俺の名前は縁切霧耶。
えんきりきりや

由緒正しいか知らないが、人と人との縁を切つて生活してきた一族の末裔である…………と、なんともかつこいいと思われる仕事かもしれないが、これが意外と収入に困る。

それこそ、歴史はかなり前からあつて嘘か本当かはわからんが縄文時代より前の頃から仕事をやつていたそうだ。

時がたつても偉い人とのつながりしかなくて、そのせいで今では顧客を求めていた現状でこの“エンキリ”という能力を使うものはあまりいなくて普通に働いていたりする。

そこで、仕事内容はただ単に縁を断ち切る…………言葉にしたら簡単…………そういう感じだが、これが意外とやつていることはすごい。

一度断ち切つてしまえばその縁が戻るには再び新たなきづかけを生むしかない。

何のことかはよくわからないと思うので説明するにはまず……この“エンキリ”について説明したいと思う。

俺たちには人と人との縁が見え、それが太さによってどのくらい親密なのかわかる。

腐れ縁だつて見えるし、運命の赤い糸だつて見える。
それを棒状のもの（棒ならなんでもいい）

）できつてしまふのが俺たち縁切り一族のお仕事である。

縁を断ち切ることによって不幸要素も切ることが可能で……不幸との縁を切ればある程度は幸せになることが出来る。

たとえば、一人女性がストーカー行為にあつているとしよう。

相手が誰なのかわかつていれば……まあ、ここまでわかつているのなら警察にいくだらうが……その人物との縁の糸を見つけて断ち切りやすい。

断ち切つた結果、相手は切れてしまつた縁の糸のおかげでふとした拍子にその相手と疎遠となつてしまふ。

その反動か知らないが、縁の糸を断ち切ると、断ち切つてしまつた相手と自分に何らかの事象が起つこる。

縁を切つた相手がストーカーだったらそのストーカーが警察に捕まるか、結婚することになつたりするのだ。

つまり、警察と縁ができるたりするわけである。

まあ、きつてしまつた縁の糸を戻すには努力というか、執念というか……そういうものの類があれば戻そうと思えば戻すことが出来る……かもしれない……さて、俺たち一族の能力についてはこんなものだろうか？それなら、幸せになることが可能じゃんか！しかし、その昔に調子に乗つて不安要素をぶつんぶつん切つちやうよくな一人の“エンキリ”がいたそうだ。

エンキリは自分の縁の糸を切るのが非常に難しく、一人の男を幸福にするためにその力を使つたそつだが……その男は幸福を求める

ぎたために不幸をも招きいれてしまったのだ。

理解できないと思われるので一つのわかりやすい例を挙げよう。

まず、一人の男が宝くじに当たった。

物凄い額を手に入れ、男は大富豪となつて豪邸を建てたのだった。勿論、財産を守るためにセキュリティを万全にしていた。

だが、ある日……強盗に入られて殺されてしまったのだ。

彼が宝くじに当たらなければそんなことにはならなかつたかもしないのだ。そんなことで、どうやらこの“エンキリ”という能力は使いどころの難しい力のようで他にも一つの糸を断ち切ろうとして他の糸も切っちゃつたといいつつかりミスも報告されている。よつて、扱いがうまいものしか使うことが許されていない。

まあ、繰り返すことにはなるがとりあえず他人の縁を切るのが俺たち一族のお仕事ということだ。これで理解してもらえただろうか?

「今日からここが俺の家かあ……」

俺の声は弾んでいる。目の前に広がる少し古ぼけた日本家屋。これはその昔に名のある“エンキリ”が使用していたという……反省小屋である。

「…………はあ

俺の声は沈んだ。

状況を説明しよう。

俺の一族はもう、ナウマン像を追いかけていた頃からの家系であり許婚制度を未だにとつていてる。

縁断ち切るときは歯のない刀の柄を使つたりしているのだから充分古い。

まあ、それはいい……許婚というのは知つてゐる人も多いだろが……小さい頃から結婚する相手が決まつてゐることをいうそ�だ。俺にもその許婚がいた。

ああ、そりやうらやましいなあと思う人もいるだろ?。だが、甘い。

可愛い相手ならまだしも、俺の相手はぎょっとするような人物だった。

大富豪の娘らしく、わがままの限りを尽くす許婚に俺はぎょっとした。後に頭にきた。

だから俺は当然、婚約破棄を訴えたのだが通らなかつたので俺は許婚の相手の背後を取つて……俺と許婚の縁をめつたために切つてやつた。それはもう、俺の“エンキリ”史上最大最高にして後も残らないように断ち切つてあげましたとも。そして、俺の許婚は新たな縁が生まれてそつちにいつたそうだ。これでもう、完璧に疎遠となつた俺だつたのだが……血を重んずる俺の一族の人たちはこの行為を

「一族に反逆するものの行為」とみなしたらしい。

そして、今の状態となつている。

ちなみに、俺がこつそりと逃げ出さないように俺を監視する“エンキリ”、その数四人。トップ10の中から10、9、8、7で来ている。本当はトップ10が全員俺を監視するはずだつたそうなのだが……出来なかつたそつだ。先にばらしておくが俺の爺ちゃんがトップで次にはあちゃん、次が俺の父さん、母さん、姉さんで5まで……実力は高いのだが、どこは偏屈なところもあるので

「たまには一人で考へろ。お前に時間を割きたくない！」このままお前との縁を断ち切りたい！」と全員が全員おつしゃつていた。ああ、そういうばあちゃんはそんなことをいつていなかつた。ばあちゃんは

「残念ながら、あたしゃ、目が悪いから縁の糸を断ち切る前にお前の首を断ち切りそつじや、イヒヒヒ」とついていた。ぞつとした。

「ま、俺が五番目だから逃げようと思えば逃げれるんだけどね」

ちなみに俺を見張つている人たち俺をどこかに見逃してしまつた場合…………“エンキリ”的族と縁を切られてしまうそうだ。

まあ、それを行えるのは今の一族の宗主である俺の父さんだけなのが……

俺が飛ばされたのは俺たち一族とはあまり関係を持たない場所だ。ここで俺が反省するまで……つまり、許婚を自分で失つたのだから自分で結婚する相手を見つけなくてはいけないのだ……実家に帰ることは許されない。個人的な意見としてはまだ結婚するには早い。それに、結婚してしまってはもう“エンキリ”は自由になれないものである。これもまた、古めかしい制度で……家庭を持つた“エンキリ”は常に妻と一緒にではないといけないのだ。どこに行くにも一緒に、四六時中一緒に考えて考えられねえ……

そういう事情で、俺はまだまだ一人でいたいのだ。女の子？そんなの興味のかけらもないね！

「お、可愛い女の子発見！どう？そこの君い、俺とお茶しない？」

「…………きやあ！変態よ！――」

ちつ、逃げられたか……

こほん、まあ、さつきも言ったとおり……俺はまだ結婚しない予定である。これもまた、俺自身に女性との縁が薄いということもあるのだが……

「ねえねえ、その君！俺のバットを使ってみないかい？」

「何よ！この変態！」

ばしーん……

これはまあ、あれだ。許婚との縁を断ち切ったときにやりすぎたらしい。俺 자체がもてないわけではないのだ。

「許婚との縁を切る」はずが……

「女性全般との縁」を断ち切っちゃったようだ。そんな細かい力加減なんて俺、ちょっと苦手なのだ。切るなら最後まで切る！切らなければ最初から切らない！というのが俺のモットーであるからやるなら最後までなのが……悲しいことに約束を護る最後の手段なのである。もつとも、そんなお馬鹿なことをいうのも好き勝手なのだが……とりあえず、女友達の一人でも作つておかないといづれまたおかしな

「許婚」が現れる可能性がある。あの時は

「これ、俺の部屋の鍵だから………」と言つて（ちなみに、俺の部屋には鍵がつけられていない）俺の部屋に入つた許婚の背後を取つたのだ。だが、次は両親が本気を出してしまつかもしれん……といふわけで、俺による俺のための俺の自由な生活を守るために俺は女の子と仲良くならなくてはいけないのだ！なりふり構つていられねえ！今日から俺の戦いの始まりなのだ！

プロローグ／第一話　自由を求めるHンキツ（後書き）

さて、どうだったでしょ？つか？うまく話しが続くよいつな感じになつていたら幸いです。今後はどうこつた感じにするか一応決めていますが……まあ、ゆっくりやつてこいつと通つてます。短編とはちよつと違つてゐると思つてください。

第一話 始まったエンキリの生活（前書き）

せかわん、 こんなに早く感想、 ありがとうございます。 嬉しかった
です！ 今回はエンキリのお仕事のお話しです！

第一話 始まったエンキリの生活

「……それで、一つ二つおさらいをしてみよう。

俺の名前は縁切霧耶だ。

エンキリ一族の末裔にして自分の許婚との縁を切り、やうやくは女子との縁まで切ったという物凄い堅物主義者だ。まあ、女の子との縁が切れたことを俺自身が知るためには少々実力不足（補足）だがエンキリは自分と他者との縁を見るには相当の実力がないといけない（）で無理だったのでじいちゃんに聞いたところ見事に「縁なしじゃ」といわれてしまった。つまりこの、「これではいけない！早く孫の顔が見たい！」と両親が思つたおかげで俺はとりあえず女子の子と親しくならないといけなくなつたわけである。

「アレ」のお姉さん、俺と一緒に俺の子を探す素敵な冒険してみない？

「冒険？」

「そ……」

「ふすり……

相手はチョキで……お、俺の鼻の穴に指をつつこみやがつた！？

なんつ～女性だ！？

「……ふがあ！」

「冒険ならちよひび終わつたわ。あんたの汚い鼻の穴に手をつづこんでやつたからね……お宝はあなたの汚い鼻水よー！」

「ばしん……」

さらにほっぺを叩くと綺麗なお姉さんは去っていった。つづむ、どこがいけなかつたのだろうか？こりや、女の子の友達を捜すのは無理ではなかろうか……

「なりふり構つていられねえな……」

昨日ここにやつてきてまだ高校にはいっていない。学力云々……といつより、この一週間の間はエンキリとしての顧客を探さないといけないのである。さらに、今日の朝に届けられた手紙（両親から）を読んできょとした。俺に残された期間は後一週間！手紙に書かれていたことは

「後一週間にあなたの一の許婚を宗家に呼ぶので誰もいなかつたら帰つてきなさい」ということである。誰よりも自由を愛する俺だ。そんな俺がこのまま自由になるには……女友達を作り、両親に知らせることがある。そうすれば許婚の件は取り消しになるだろう。

道行く姉ちゃんたちに声を掛けってきたのだが……誰も引っかかるない。そりや そりやうなあ、平日の昼下がり、こんな暇そうな人間に付き合おうとするなんて人のいい人間がほいほいと歩いているわけない。いたとしてもわがまま娘だけだ。

「けどなあ……それじゃ……次で百戦連敗だし……よし、最終手段だ！」

「俺の目の前にいるのは一人の男性だ。やつになつたわけではない。

「エンキリのあなたが縁結びですか？」

「ええ、そうです」

そう、俺の目の前にいるのは縁結びの神様を奉つてている神社だ。わらにもすがる思いでここにやつてきた。元来、縁結びの神様とエンキリは敵対するような感じなのだが……さつきも言つたとおり後がないのだ。敵に頭を下げるのも構わないということなのだよ。

「もつとも、ここのお神主さんが結婚の告白百五十連敗だからなあ……」

……「利益ないかも」

「失礼な！今度は大丈夫ですよ！」

そういうて神主さんは俺に必勝祈願をしてくれた。まあ、この神主さんとは結構長い付き合いだ……ちなみに以前俺がいた高校の先輩だった。

「さ、霧耶君…………これで大丈夫ですよ。どんな相手でもあなたにめろめろのはずです」

「本当かなあ？そんなことが出来るのなら先輩、すぐに結婚できますよね？」

先輩の縁は見事に女性と縁がない…………というわけでもなく、逆に縁が多くすぎる。先輩は優柔不斷な男だから浮氣をしていたりしてそれが原因でふられていたのだろう。逆に運がありすぎるとも問題だからな……

「大丈夫！僕を信じなさい」

「まあ、実力は信じますよ。ありがとうございます。無料でしてくれたお礼として誰かとの縁を切つてあげましょうか？ああ、親とは駄目ですよ？それやると俺、やばいですから」

本当はただで縁を切るのはいけないことだ。なぜなら、無料でエンキリをしていると後々厄介なこと（人は不幸要素だけの断ち切り願望多し。以前説明した通り）になるからだ。

「そうですか、それならちょうどあなたにお頼みしたい人がいるのですよ……今、ちょっとでてますからいいので……宗家に行くよう伝えておきますよ」

「ああ、それならここにいるようにいつておいてください」

俺は自分の住んでいる家の住所を渡した。

「おや、こちらに引越ししてきたのですか？」

「まあ、ちょっと色々とあります……」

「ははあ、どうせお客様さんの切つてはいけない縁を切つたんでしょう？」

鋭いが…………はずれである。

「違いますよ」

「そうですか……今、顧客をさがしているようですが……女性は物で釣るとよく引っかかると思いますよ……まあ、がんばってください。他にお客が来たのでこれで……」

そういうつて先輩は新たにやつてきた参拝客のほうに向かっていつた。

「…………なるほど…………確かにやつてみる価値はありそうだ…………」

俺は今、机に座っている。そんな俺の目の前を一人の女性が通りかかる。

「ああ、そこのお嬢様…………（ちょっとやりすぎたかな？）」

「何？私のこと？」

「…………そう、そうです（嘘！？引っかかった！）あなた、ストーキングされてませんか？」

「え？あ、あなた占い師か何か？」

女性の顔色が変わった。

「今ならその不幸な縁、私が断ち切つてあげましょうか？」

付け髭をつけ、サングラスをしている。はたから見るとめちゃくちゃ怪しいのでもしかしたら誰かが警察に俺のことを連絡するかもしれないが…………一人でも顧客を作つておけば問題はないだろ？。そのまま親しくなつて…………ヒヒにという展開も考えられる……頭の中でそんな計画を立てていると

「ほ、本当に切つてくれるの？」

「ええ、そうです……」

「いんすきじやないでしょ？うね？」

やはり、警戒深いか…………落ちない城を落としたときは嬉しいからがんばるか…………

「そう思いになるなら今は無料です。私の力をパンチワのよう見せましょ？！」

無料と書いてタダと呼ぶ…………どつかの小説のタイトルみたいな

言い草だが……女性はタダといつ言葉を聞き逃さなかつた。さすが先輩のお言葉だ！

「わかつたわ……手を出せばいいの？」

「いいえ結構です。しかしまあ、あなたはストーカーさんに大事にされているのですね？」

集中して見えるストーカーと思われる相手との縁の糸は結構太い。もうちょっと太かつたら俺では手に負えなかつたかも知れないな……人の思いというものはそれほどすごいものなのだ。まあ、今回の場合には太いおかげで探しやすかつたけど。

「…………あなたはただ、目をつぶつているだけでいいのです」

相手が目をつぶつた隙に俺は日本刀の柄を取り出して横に一閃する。糸は見事に断ち切れた…………まあ、今回はあつさりとしてくれていたおかげで助かつたな…………この土地での初仕事としては上々といったところか？地味すぎて面白くもないな…………

「これで…………終わりです」

「え？ もう？」

「ええ…………まあ、はじめは嘘だと感じるでしょうが…………これは事実です。そうですねえ……事実だつたらあなたの知り合いの女性に私、エンキリのお話ををしておいてくださいね…………ではまた…………」

俺の視界にちらりと警察の姿一人確認できた。そして、怪しい男がちょうど出てきて助成が一人の警察を捕まえてあの男にストーキングされたといってその場で取り押さえられる…………とまあ、こういうのが縁を切つた効果だ。二人とも警察と縁が出来たというわけである。しかしまあ、それにしても初めてにしてはかなり地味な仕事だつたなあ…………

俺は遂に始まつたエンキリ生活に嘆息しながらも帰路についた。

第三話 ハンキリと学校（前書き）

さて、これからは登場人物も増えていく予定です。前書きではメッセージや評価をしてくださった人たちにお礼をしていきたいと思っています。

三、

よいこのみんなあ、霧耶お兄さんだよ～？前回、霧耶お兄さんが初仕事を成功させたことを覚えてるかなあ？前回の仕事の結果だけど……どうやら彼女は他の土地の人だつたようで……都會に戾つてしまいあまり意味がなかつたみたいだ～……ああ、名前ぐらい聞いておけばよかつたなあ……今のところ閑古鳥という新種の鳥が霧耶お兄さんの家に来ているようでひつきりなしに鳴わっぱなしや……いつまでこんな生活、続くんだろ？

家にいても暇だ………というわけで、学校に行つてみよ～……学校の生徒たちを顧客にしちまえばいいだろ？この転校はもとから決まってことだし、少々予定が早くなつても大丈夫だつたようだ。しかしまあ、まだ四月だ。転校生はおかしい存在である。

「え～この季節には珍しいが転校生を紹介しよう。率尚加高校からやつてきた縁切霧耶君だ。みんな、仲良くするように」

「縁切霧耶といいます。これからよろしくお願ひします」

できるだけ他人を見ないよにして後ろにある小さな黒板を見ながら話しをすることにした。別に花も恥らうお年頃というわけではない。この教室の中にちょっとばかり心してみないと

「うわっ！？」と呟んでもしまうような縁の糸を持つ相手がいるかもしれないからだ。転校初日からさよつとしていたらおかしい人物だと思われる可能性がある。

先生はどうやら堅苦しい先生のようで、俺の簡素な挨拶に「好きな食べ物とかは？」などとつっこんでこなかつた。

「縁切君の席は……ああ、すまんね……今日、風邪をひいている人の席に座つて欲しい……明日までには君の分の席をその隣に配置しておくからね」

指差された席は窓から一個離れた席だつた。まあ、無難な場所だらう。奇異の目で……そりやそつた、背中に唐草模様の竹刀袋をしよつたままだからな……見られていることもめげず、俺はその席に座つた。隣にはちょっと暗めの印象を受ける女子が俺をチラツとだけみてきたので俺は

「ニカツ」というさわやかな顔をしてあげたのだが……相手はおびえたような目をして俺からあつという間に目をそらした……どうやら、この人とはお友達になれないようだ。

「ん?」

ちらりと隣の女の子を見たのだが……なにやら不穏な縁の糸を見たような気がした。今はまったく見えていないし、気のせいだつたかもしれないな……ま、いいか。

お昼休み、俺の周りには当然のよう人にだかりが出来た。主に男子なのがしようがないとは思うが……女子が集まってくれないのは縁がないからだろうか?

「へえ、そうなんだなあ~」

「ところでさ、霧耶、お前自分の股間を見てみろよ?」

「うわっ!別世界につながる扉が全開!~これが奇異の目の正体か!~?」

「俺さ、お前見てこいつは大物が転校してきたつて思つちまつたぜ?」

「なるほど、これじゃ縁があるうがなからうが女子が近寄つてくるわけないな」

「霧耶、お前がお馬鹿さんなのはよおく理解できたぜ~」

まあ、こんな感じで一応は打ち解けることが出来た。これに関しては問題ないので省略させてもらおう。問題が起つたのはこの後だつた。扉が開いてたことも問題だけどな。

家に帰ろうとするとき何か書き物をしている一人の男子生徒の姿が

映つた。

「ん？」

名前は覚えていないが俺に話しかけてくれた一人だったと思うのだが……その人物からは物凄い運命の赤い糸が見えた。普段は小指から伸びている程度なのだが……それは彼の体をがんじがらめにしており、三本ほどの糸が混ざつて一本になっているのだ。さらに一メートルほどの太さの一本の赤い糸が……いや、もう柱といったほうがいいかもしないな……彼の背中から伸びている。なに？これ？生まれてはじめてみたよ……運命の赤い糸つていうより……運命の紅い意図？

「あ～ごめん、そこの君……」

「え、ええと……縁切君何かな？」

放つておくのもなんだか恐かった（ぶっちゃけ、運命の赤い糸を持つていてうらやましかった）ので話しかけることにした。むう、一人に対して一本が基本の赤い糸を何故この人物はこんなに持つているのだ？全世界のもてない男がこの人物の赤い糸を見たら怒り狂うに違いない。俺？俺は勿論見えるから嫉妬に狩られてますね「わりいけど名前忘れちまつたん教えてくれないか？」

「ああ、名前まだいってないよ？」

「……」

氣まずい沈黙の後……

「僕の名前は天道時時雨てんどうときじゆれつて言つんだよ。時雨つて呼んでかまわなければ……」

「なるほど、時雨というのか……なあ、ちょっと時間あるか？」

俺はその時雨という男子生徒を呼んで廊下に出た。そこへ、一人の女の子がやってきた。

「時雨、早く帰るぞ？」

「え、うん……」

「……」

そして、俺はその人物を見てぎょっとした。

赤い糸が……いや、赤い柱がその女の子につながっているのだ。

「ああ、なるほど……」Jの人が運命の相手なのか？それにしてはちょっと太すぎやしないか？俺のあれより太いなんて……まあ、そんなことはどうでもいい。

「こいつは誰だ？」

「ああ、この人は今田この高校にやつってきた縁切霧耶君」

「…………どうも」

しつかしまあ、数奇な人物だな、この天道時時雨とやらは……ぼさつとしているような雰囲気も受けるし、甲斐性無しのようにしか見えない。初対面の相手に少々失礼かもしれないが、……まず真っ先に詐欺師に目をつけられそうだ。俺だったら狙うね

「時雨、変なことで呼び止めてすまなかつた……どうやら俺の思ひ過ごしだったようだ」

「え？ うん……僕は用事が出来たから……じゃあね……何か困つたことがあつたら聞いてきて構わないよ」

そう言つて時雨とその女の子は去つていった。

「つうむ、世の中には想像を絶するような人物がいるんだなあ……つか、うらやましいよなあ、あんなに赤い糸があるなんて……黙つて切つとこうかな～」

「ええと、すいません……」

一人ぶつぶつ言つていた俺の耳に一人の女の子の声が入つてきた。振り返るとそこには俺が友達になれないと確信したあの暗めの女の子が立つていたのだ。声が鈴のようだ。

「えと、何かな？」

「あの、お兄さんから聞いたんですけど……あなたが人と人との縁を切る者つて言つている霧耶さんだったんですね？」

「ああ、ただけど？」

「どうやらこの相手は俺の知り合いの妹さん……か何かだろうか

?相手は興奮してきたのか胸の前でグーを作ると俺に詰め寄ってきた。

「ええと、いくら出せば縁を切つてくれるんですか?」

「え、えっと……」「..」

ここで肝心なことに気がついた。初歩的なミス…………つまり、値段を決めていなかつたのだ。貴族相手には法外な値段をふっかけたりするのが常道なのだが……

「え、えっと……」

「いくらですか?」

気がつけば廊下の隅に追い込まれており…………相手は俺を下からねめつけている様な感じだ。なんだか新しい世界に目覚めちゃいそうだ。はたから見たら巷で今噂のかつあげという奴に違いないと思うだろうな。しかし、俺の中の灰色頭脳にまるで高化学兵器を次々と避けるよつな超能力パイロットがたまにおこす

「ぴぴーん」という青い光が一つ差した。

「え、えっと……俺の友達になつてくれれば今回はタダ」

「わかりました!今日から友達ですね?」

「あ、ありがとう……」

まあ…………見た目と中身つて違う人が多いつて聞くけどあれつて本当だつたんだな。

第四話 ハンキリのお仕事（黄昏）

四、

一人暮らしの男子生徒の家にとつても可愛い女の子がやつてきた！日はだんだんと沈んでいき……一つ屋根の下には花も恥らう女の子と二人きり……一人を邪魔するものは一人もいない。ああ、なんて燃える、いや、萌えるシチュエーションなのだろうか……ま、実際のところはデスクワークと実技が混じったなんのことはない、ただの縁切りのお仕事の依頼だ。こんな桃色妄想ピンク仮面な状態でいたら成功するもんも失敗しちまう……気合入れていくとしますかね～

田の前にいる人物に座布団（自腹で購入してきたもの）とお茶（これまた自腹）にお菓子（和菓子つて意外と高いんだよなあ～）を差し出した。今、目の前の相手は最中（もなかと呼ぶそうだ）に手を出してくる。ああ、そういうえば後五日ほどに迫っていた許婚の件は見事にご破算となつた。今日から友達になつてくれた田の前の女の子のおかげである。だから、座布団にお茶、お茶菓子は当然の待遇なのだ。

「ふうむ、なるほど……」

俺は田の前の女の子、手野見結衣さんの話を聞いた。どうにも、最近不幸続きでその始まりが家族旅行から帰つてきた後だそうだ。神社に行つたりしていたから何かに憑かれているかもしさないと彼女はおっしゃつた。そして、今は茶を飲んでいる。

すばり言おう

俺は靈能力者じゃありません

「まあ、一応はみておくけど……」

集中して相手を余すことなくじつと見る。

「ん？」

あの時ちりりと見えた違和感…………それは、小指についている運命の赤い糸が青色なのだ！なんだ？時雨のときといい、赤い糸が最近ははやつてんのか？

「なあ、手野見さんには誰か許婚とかいるのか？」

「許婚？そんな時代錯誤なことがあるわけないよ～」

「じ、時代錯誤ね…………た、確かにそうだよ～」

許婚ではないのか…………じゃ、なんだろうか？勝手に判断したりして後で取り返しのつかないことになつたという例は数多く聞くからな…………

「手野見さん、ちょっと待つてくれ」

「うん、いいよ」

手野見さんを一人残して俺は電話に手を伸ばす。この時間帯、母さんは夕飯作りに忙しいだろうから掛ける相手は少々苦手だが暇であろう親父がいいだろう。姉さんでも構わないが姉さんは機嫌の悪いときに連絡すると襲つてくるからな…………

何回かの呼び出し音の後、男性の声が聞こえてきた。

『もしもし、霧耶か？どうした？』

「親父、依頼主の小指に青い糸がまきついているんだけど…………どうしたらいいんだ？」

『知るか…………といいたいところだが、その青い糸、太さはどのくらいだ？お前のちつちゃな亀さんぐらーいか？』

「違うわい！」

『ならば、今のうちに切つておけ…………じゃ、俺は母さんの夕飯を食べるからじゃあな』

あつという間に電話は切られた。説明なしかよ！？しかしまあ、あんな父親のもとで育つてよくこれまで俺はまじめに育つたなあ……

田の前に座つてゐる手野見さんにどうしたものかと俺は考えたの

だが……仕事に関しては嘘をつかない親父を信じることにした。

不思議そうな顔をしている手野見さんに告げる。

「う、うんとな……とつあえず……切っちゃつ」といすり

「え、う、うん……よろしくお願ひ……」

まあ、あの親父のことだ。仕事のことで嘘はつかんだら……

「私はどうすればいいのかな? 田をつぶつておけばいいの?..」

「いや、別に普通にしても構わない……そのかわり、絶対に動かないでくれ」

間違つて他の縁を切つてしまつたときは大変だ……正直言つて、過去に一度幸福との縁を間違つて切つてしまつたエンキリがいるからな……その相手はそりやもつ、悲惨だった。金はすられるわ、どぶにはおちるわ、空から鳥の糞が落ちてくるわ……

俺は集中するべく……小指の付け根辺りの部分に刃のない刀で狙いをつける。

「」

「」

静寂があたりを支配し、聞こえてくるのは俺の心臓の鼓動だけだ

「せりや」

そのまま刀を振り落とし、俺は見事に青い糸を切り落とすことにした。しかしあま、こちらにやつてきて様々なものをみたな……柱並みの太さの赤い糸に、青い糸……これってどうこうことだ?

「終わった」

「案外、あつさつしてるんだね?」

そりやまあ、そうだ。

お化けがついていたりするのなら準備をし、本人 자체が清められてそこでははじめて除霊が行われるのではないか? 門外漢なのでよくわからないが……そんなものだ。しかし、エンキリ行為は本当にあつさりとしている。糸を見つけてそこに精神の刃を当ててやれば……もともと、そのことも実力しだいなのだが……すば

りと切れてしまつものなのだ。赤子の手をひねるよつなものだと思つてもらえれば幸いである。

「じゃ、そろそろ帰るよ」

「ああ、気をつけて帰つてくれよ?」

「うん!」

手野見さんはそういうて普通に帰つていったのだが……俺が思うに、ここでまた新たな縁が生まれるだらう。
あの青い糸がどういうものかはよくわからぬが……………とりあれ
ず縁を切ればまた誰かとの縁が生まれるのである。それがどの方向
性に伸びていくのかはまだわからない。勿論、切つた俺にも何かし
らの縁が生まれたのだろうが（できれば金髪美人とお知り合いにな
りたいものだ）俺のことはこの際放つておいて構わないだらう。手
野見さんに変な縁が出来てストーカーにつけられたりしたら可哀想
だ。

それならば俺がするべき」とは決まつてゐる。

「手野見さん、言ふ忘れてたことがあった!」

「何かな?」

まだ第一の門を通りていないとこひで追いついて俺はそんな嘘を
つきながら彼女の隣に立つた。

「…………女性だけのアフターサービス。俺、きちんと家まで送つて
いく」

「そう?だけどそんなことしなくても…………」

「いいつて!」

「いや、こいつしないと仕事上かつこいつかないからさ」

無理やりにでもついていき…………俺は新たな真実を知つた。

歩いて一分経つただろつか?いや、経つてないな。

「こじが私の家」

「…………ああ、お向かいさんだつたのね」

田の前に立つていた家がなんともまあ…………手野見さんの家だつ

たのだ。俺は門の前でぼさつと突っ立っていた。

手野見さんは自分の家の門をくぐつて俺に手を振った。

「じゃ、また明日ー！」

「え、ああ……………また明日……………」

家の中に消えた手野見さんに俺はため息を吐きながら家に帰ることにした。ああ、まあ、こんなに家が近くだとは思つてもいなかつた。

「……………まあ、いいか……………」

俺も家の中に消えようとしたらと……………

「本当にありがとー！」

後ろを振り返れば一階の窓からそんなことを俺に告げてくれたのだ。ううん、こういわれるとすごく嬉しいんだよなあ。それで、今日は仕事も終わつたからさつさと寝るかなあ～

だが、俺は長い長い夜がこれからあるとこ「う」とをまだまだ理解していなかつた。

第四話 ハンキリのお仕事（黄昏）（後書き）

さて、どうだったでしょ？ 今回…… 霧耶について細くしておきたいと思っています。霧耶はちょっとスケベな主人公であるということを伝えておきたいと思います。補足説明としては今のところでそんなところで一人では立つことできない性格です。皆様、これからもどうかそんな霧耶の生活を見てやって下さい。

第五話 ハシの血界訪問（前編）

タンポポさん、毎度毎度ありがとうございます！感想などをお聞かせください
くじやせり、うれしいものです。

第五話 ブシの自宅訪問

五、

拙者、名前を菅野川焰華と申す。朝、起きると非常に体がだるく、ちょっとした風邪（体温計は40を示していた）をひいたようだつた。どうも、先日の風呂の代わりに滝を浴びたのが間違いだつたようだ……まあ、我が家秘伝の風邪薬を飲めばこんなもの午前中には治るに違いないから気にしないでいいだろつ……

「エンキリ…………ですか？」

拙者は今、箸を片手に昼食をとっている。薬が効いたのか、既に風邪は昨日のうちに治つてしまつてゐるようだつた。そして、拙者の祖父菅野川大源が拙者の前に座つてゐる。厳しい表情をしているところをかれこれ十分はやつてゐる。

「左様、エンキリという一族の一人がこの地にやつてきた…………氣配としては後五人ほどいるな…………」

厳しい表情をして大源様はそのようなことを言つてゐる。大源様のような猛者が冷や汗を流してゐるところを見ると…………かなりの手練なのだろう、そのエンキリ一族とは…………

「あ…………それで…………その、エンキリがどうかしたのうじょうか？」

「そうじゃ、お主にはそのエンキリの坊主を倒して欲しい。手段はいとわぬ…………あやつら一族には普通の剣術では勝てんからな…………卑怯なこともしてくるからう。まあ、実力はとても高いのじや…………冷や汗だらだらのところを見るとそれほど強いのだろうか？だが…………拙者は拙者の道を行くべく、そのような手練と戦えることを嬉しく思つ。

「…………焰華！」

内心、喜んでいる拙者に大源様は私の名を唐突に呼んだ。ぼーつ

としていたので当然、返事は遅くなってしまった。

「は、はいっ！」

「わしゃちょっと廁に行つてくる」

「は、はあ……」

そういうと大源様はいそいそと去つていったのだった……ああ、なるほど、男とは大事な話があるときは生理的なことも我慢して告げねばならぬのか……これが男の決断というものなのだろう…実際にいい勉強になつた！

「ふむ、ここがエンキリの……自宅か」

静かに、そして雄大に立派な日本家屋が拙者の庭の前に現れた。まさか、これまで空き家だつたこの日本家屋がエンキリの『修行場』だとはぜんぜん知らなかつた。大源様が言うにはここでエンキリの男と戦つて負けてしまったそうだが……あの大源様を倒す相手とは相当な実力者！そのような相手と戦えるとなると拙者は心が高鳴つてくる！

「ござ、参らん！」

正々堂々と戦いたいのだが……敵の情報も詳しく知るのが戦いでの捷だ。それならばいつそのこと寝ているところを不意打ちしてしまえばいいと思うかもしれないが、拙者の中では不意打ちを使つたりするのは集団で動くときだけであり、今回は一対一の戦いだ。誰だつて丸腰のときに戦つて勝てるはずがない。

築き上げられた趣のある壁を音もなく駆け上がって拙者は庭に着地した。最近よく使われている防犯道具の類はなく、そこにあるものは広い庭に苔生した池……広い庭には桜の木や梅ノ木が生えており、暖かな春風にその綺麗な花を揺らしていたりもする。

「……ここは良い場所だな……」

枝には鳥が止まつており、時折静かに鳴いている。そのちょっと赤っぽい鳥の名前は良く知らないが、その鳥は人になれているのか拙者の肩に止まつてさえずつた。

玄関のほうから入つてはいないのでどのよつた感じのかはわからぬが、苔生している池の向こうには道場のような建物が見えた。少々寄り道をしてしまつようだがそちらのほうにまじってみることにした。

「ほほつ……」

我が家が所有している道場よりも小さいが、管理が行き届いているのか床は綺麗に掃除されており、埃一つ落ちていない。日当たりの良い場所に設置されているのか……窓からは田が差し込んでいて温かい。

竹刀や木刀もよく管理が行き届いており、数ある中にせてくれねど一つもなかつた。道具も大事にしているのか、そのエンキリ一族とは……それならば拙者の腹は決まつた！

「討ち果たすには充分な実力者！」

こうしてはおれず、実際にこの家に住んでいたエンキリという人物に会つてみたくなつた。きっと、筋骨隆々とした大男なのだろう、「それまで少しばかりゆるりと休憩させてもらつか……」

拙者は道場の一畠田当たりの良い場所に腰掛けると田をつぶつた。「しばしの間……場を借らせてもらいます」

道場の主であろう、神棚に頭を下げて田を瞑る…………一時間ばかり…………時間をもらつことにしよう。

「ちちちちちち……」

「…………ん？」

先ほどの小鳥が私の肩に止まつて鳴いていた。

「つるさいではないか…………はつ……」

しまつた！気がつけば夕刻になつており、黄昏時になつている！

拙者はびつやら寝すぎてしまつたようだ！

「い、こひしてはおられん！」

拙者はあわてて起き上ると神棚に頭を下げてその道場を後にした。そして、黙つて家中に入つてエンキリの姿を探す。大源様か

らは『明日の朝までには戻つてくるよ』といわれてゐるのだ！つまり、拙者に残されてゐる時間はあまりないということなのである。こうなつたら不意をついて刃を首に当ててでも決闘の承諾を得ねばならない！

人の気配がしたのでその部屋に張り付くよにしてふすまをちょっとだけ開ける。既に明かりがつけられており、人影が一つかり見えた。エンキリと思われる男は大源様よりやせており、弱そうにも見えるのだが……

「…………手野見？」

そして、何故かそこには拙者の隣の席に座つてゐる手野見結衣の姿があつたのだ。エンキリとは知り合いなのだろうか？

「…………つた」

「案外…………してゐるんだね？」

何かしらの話をしており、どうやら手野見は帰るよだ。玄関のほうまでエンキリと思われる男が手野見を送つていく。見送つたと思つたのだが、一瞬だけ鋭い目をするとエンキリも玄関を出て手野見を追いかけていく。目の前に手野見の家があるので何か用事があるのだろうか？

手野見と少々話し込んで去つていった。うつむ、人見知りする手野見があんなに嬉しそうに話しているところを見ると旧知の仲なのだろう。

「さあて、今日も疲れたから寝るとするか…………」

エンキリは自宅の玄関に入ろうとする後ろのほうを振り返つた。そこには一階から顔を出している手野見の姿があつた。

「本当にありがと！」

手野見は嬉しそうにそんなことをいつて今度こそ本当に姿を消した。エンキリの顔は嬉しそうにしていた。

「さてと、あとは寝るだけだなあ～」

エンキリはそのまま自宅に消えていった……

「ふう」

拙者の口からため息が出てくる。」のよしな」とをするのは久しぶりなのでなまつてているのだろう。普段だったら正面から突撃していくのが拙者の常口頃の態度なのだが……慎重に「」とを運ばなければ打ち損じるかもしれない。

「つづむ、しかし……」

隙があるとは思えなかつたのだ。誰かに見られている『』だつてする。

「おーい、そこの人、俺らちでなにしてるんだ? わたしから一人で何言つてんだよ?」

「! ?」

そんな声がしたので後ろを振り返るとそこには……ヒンキリの姿があつた。

第六話 縁切りのお仕事（宵ノ口）

六、

俺の爺ちゃんは剣が好きだった。

いや、なんだか過去形になつていて、別に死んでいるわけじゃないので気にしないでもらいたい。

俺の爺ちゃんは俺と姉さんに剣術を仕込み、毎朝勝負をさせられた。一撃必殺という言葉が大好きな爺ちゃんは居合い系統の剣術を学びながらも実は侍よりも忍者のほうが好きだったりする。だから正々堂々という言葉など通用しない相手で卑怯結構、不意打ち万歳！と言っていた。もちろん、俺もそれに賛同だ。

手野見さんを家まで送つて（田の前の家だったのだが）俺は自宅に戻つた。

勿論、夕食を食べていないのでこのあとは夕食を作るという予定になつていたのだが、今日ぐらいはサボつても構わないだろう。いそいそと台所に向かおうとすると、誰かがこの家の中に入ることに気がついた。別に第六感が働いているというわけではなく、知つての通りこの家にいるのは今のところ俺だけだ。そして、さりにいうなら俺は今のところ俺自身の縁の糸を見ることが出来ないでいるのである。そんな俺の目には誰かの縁の糸が映つたのだ。

「誰だ？」

もしかしてお客だらうか？そんなことを思いながら玄関のほうに歩いていくと……縁側の廊下に人影が見えた。どうやら下を向いてぶつぶつと何かいいつているようだ。ここはまだ片付いていないところなので少々乱雑で割れているガラスだつてあるから素足は危険なのだが静かに近づいていくことにした。

「おーい、そこあんた、俺んちで何してるんだ？さつきから一人で何言つてんだよ？」

「！？」

相手は驚き、じちらを急いで振り返ろうとして……

「あいたっ！」

しりもちをついたのだった。しかも、それだけではないよつで……電気に照らされている手から血が流れている。びつやう、落ちていたガラスのかけらで切つてしまつたようだ。

「いたた……」

「ああ、すまん……ちょっとこっちに来てくれ」

相手の手を掴んでとりあえず危険なこの場所から一人して歩いていつたのだった。

ガラスのかけらが刺さつてなかつたようで、よかつた。相手に包帯を巻いてやりひと段落をついたところで先ほど手野見さんに出してあまつた茶菓子と座布団、お茶を出してあげた。

「か、かたじけない」

「いや、気にしなくて結構だ」

頭を下げてきたのでこちらもそれ相応の態度を示すこととした。しかしまあ、はかま姿にいまどき珍しい長い黒髪なんて……あとは刀を差してたら完璧に時代劇の人間だな。

「あんた、俺がエンキリつてこと知つているのか？」

俺はおながが空いてきていたので余つていた最中に一つ手を出した。

「え、ああ……それをしつてここまで来たのだ」

「なるほど……」

お茶を飲んでいる相手に俺は確信した。このちょっと時代錯誤した侍娘さんはお客だ。お客とは何か……“神”だ。全知全能にしてお金という平和の“鐘”を鳴らしてお金を俺に恵んでくれる神様なのである。

「誰との縁を切りたいんだ？」

「縁を切る？おぬしは何を言つてゐるのだ？」

わよとんとしているところを見るとどうやら、俺が考へていたよう

なことじゃないようだ。

「あんた、客じゃないのか？」

「え、いや、客なんだが…… 刺客だ」

「刺客？」

どうやらうつと話しがおかしい方向に流れているようだ……
俺は相手に説明を求めた。ああ、客は客でも刺客なら最中なんて出
さなきやよかつたな……

刺客…………菅野川焰華は俺に決闘を申し込みたいとのことだった。

「はあ？」

俺の第一声はそれだ。それ以外に出る言葉などない。

「実力は承知の上！ ゼひとも、この拙者と雌雄を決してもらいたい
のだ」

「初対面の相手に雌雄を決してどうすんだよ？」

「お願ひだ！」

相手は土下座をしてそんなことを言つてゐる。

「…………あのなあ、どうやって丸腰の相手と決闘するんだよ？」

「刀が必要ならば拙者の刀を貸すから！」

「いや、俺じやなくてお前」

「え？」

焰華は立ち上がり、自分の腰の辺りを見る。

「しまつた！ 刀をどこかに忘れてきた！」

「…………」

顔を真つ青にしておどおどとしている。何、この人？ これじゃ、
バットを忘れて野球をするもんじゃないのか？ ま、俺の場合は持參
しているバットが常にあるから心配ないが……

「せ、拙者は…… 決闘に刀を忘れてくるなんて…… 武士の風上に
も置けない存在だ！ こうなつたら切腹を……」

「切腹しようにもそれを実行する刀がないだろ？ 決闘はなしだな」

「…………」

膝をついてよよよと泣き崩れている。ああ、なんだかみていて悲しくなってきた。

「わかつたわかつた、決闘もきちんと受けたから！木刀で決着をつけよう！な？それならいいだろ？」

「うう……かたじけない！」

鼻水と涙を混同しながら俺に引っ付いてくる

「うわ！汚いな！ひつづくなよ！」

ううん、これってもしかして手野見さんの縁を切ったから俺に出来た新たな縁なのか？まあ、この人も女だけど……あんまり嬉しくない縁だな……

道場の電気をつけ、相手に木刀を渡す。

「ほれ、あんたがどんな流派で何本木刀を使うかしらねえけど……とりあえず一本は渡しておこう。一本以上使いたいなら勝手にそこの箱から取ってくれ」

「拙者は一刀流だから一本で結構だ」

「そうかい」

相手と向かい合つ。相手は上段に木刀を構え、俺は右の腰に短めの木刀を一本差して左のほうにも一本刺してそれを両手で掴んで相手を注視……

「居合いか？」

鋭いまなざしで俺を見てくる焰華……

「いいや、適当だ」

そこで俺と相手との会話はやんだ。縁を切るときと同じようにして辺りには静寂が訪れ、窓から入ってくる月光は蛍光灯の光と溶けこんでいる。

「…………」

はらみ合いは続く……しかし、この人物……なんだつて俺に決闘

なんて申し込んできたんだ？

「隙あり！」

考え込み始めた俺に相手は猛然と切りかかってきた。もともと、この決闘にやる気のない俺は相手の一撃を喰らって負けることじよつと思つていたのだが……

「のわっちー！」

ビーム

なんと、相手の攻撃をすんで避けたまるで漫画みたいに床がえぐれたのだ！え、こ、こんなに喰らったら死んじまつ…よかつた、避けて……

「どうしたのだ？」

相手は涼しい顔でこちらを見てくる。つづむ、何、この展開？

第七話 零章の終幕、縁切りのお仕事（夜明）

七、

幼少の頃、俺は爺ちゃんの部屋に飾つてあつた木刀に手を伸ばしたものがあった。少々、そういうのに興味があつたから手にしたのだが……ちょうどそこに爺ちゃんがいたのだ。爺ちゃんは笑つて「お前を強くしてやろう」といった。それが俺にとっての地獄の始まりだつた。ちよつとした血と鼻水とその他もうもうの液体が詰まつた今思い出してもしょっぱい過去のお話だ。

目の前に立つてゐる焰華は勿論、幼少の頃から鍛えられてきた存在なのだろう。

「次は外さぬ！」

できれば外して欲しい。何故かつて？そりや、あんなのあたつたら夏場に木刀でスイカを叩き割るような感じだ。木刀なんてかんけいねえ、ありや、りっぱな凶器だ。

「待て」

「待つたなしだ！」

俺に飛び掛つてきて一撃を食らわそうとする。

恐ろしいほどのパワー・ファイターなのだろう、俺はそれをさつと避け、剣を自分の顔面に縦に構える……そこへ、下に下ろされたはずの木刀が俺の顔面を横切りにしようとして襲い掛かってくるが、俺の木刀がそれをはじく。危うくしりもちをつけそうになつたのが……そこはなげなしのガツツで踏ん張つた。

「やるな……」

ううん、まだ夏場のすいかわりで横に切られたスイカはみたことがないな。てか、そんな一撃をまともに喰らいたいとは絶対思わん。

「……ああ、ちよつと聞き忘れてたんだけどあんたなんで剣の道を突つ走つてんだ？」

「この」時勢にまじめに剣の道を突き進もうという人はあまりないだろ？まあ、俺たちエンキリは暴力に屈しないよ。」「この」という理由でそれぞれがそれぞれ、何かしらの防衛策を持つている。

「知れたこと……強者と渡り合つため、ただそれだけだ！」木刀を俺に向けてそう宣言する。うわ、かつこいいな……正直、俺には理解できんがね……

「そりゃ、余計戦う気がなくなってきたぜ」

「やめるといえど、拙者は何度もおぬしに挑戦するぞ。ストーカーになつてでも、おぬしとの決着をつけるからな」

「田がマジだ。

「お前、ストーカーの意味わかってるか？」

「よくわからん！だが、なるのならば一流を田描すとしよう。」「こりゃなんともまあ……熱く燃え滾つていてる田だろ？」「ストーカーを極めるつてあんた……極めたらどうなるんだろ？まあ、本当にそうなったのならこいつを呼び出して縁をめちゃくちゃに断ち切つてやる？」「ストーカーなんかいたらこちらの商売上がつたりだ。」「じゃ、こりでまじめにあんたを討ち果たす！」

俺は再び、腰を低くして目を細める。木刀も腰に直して相手との距離を一定に保つ……

「……正直、攻撃をしてこないからがつかりしたぞ」

「…………そりゃ、まあ、まだ一回も攻撃してないからな……俺、弱いもん」

避けて避けて防御して……そんなところだろ？でもまあ、俺は相手の攻撃を喰らつて

「ああ！最高！」とか言つちゃうような危ない感覚の持ち主ではない。

「たしかん、口ばっかりだからな……弱い犬は良く吠えるものだ」相手は期待はずれだとばかりにそんなことを言つてくる。それに対しての反論はしない。なぜなら、それは事実だからな……小さい

頃は爺ちゃんの稽古から逃げるために強くなつた。いかにして相手の行動を防ぐか、そればかりを考えて成長してきた……

「いじでおぬしをこの木刀のさびにしてくれよつー。」

「じめん、それ無理だわ……

「うおおおおおおー！」

「だつて、木刀はサビねえからよーーー！」

俺は思い切り相手の木刀に小太刀をぶつけ、それを相手の足元に投げつける。小太刀をぶつけられた木刀は起動を左にそらしてその隙に左手で長い木刀をつかって相手の腹部を瞬間最大加速で突く。

「ぐう……」

途中で手を離しているので相手は中途半端に意識を保つており、すぐさま横なぎをしてくるとこりで……俺は相手の胸倉を掴んで壁に放り投げた。

「でやあああー！」

ああ、ちなみに余談だが……投げ技などをすると起きあがんど相手を掴んであげないと思わぬ大怪我をしてしまうのがよくある。みんな、相手を思い切り投げるときはきちんとそのあとのことを考えつかんであげようね

「…………さ、これで終了」

壁に当たつてそのまま動かなくなつたと思われる焰華に俺は告げた。

「…………死んでねえよな？」

殺人罪だ。決闘だから相手が死んでもしうがない……いや、その時点で果し合いか……決闘罪に殺人罪……こりや、ちょっと洒落にならんな。わらえねえ……

「あいたたた……」

女の子を背負つて外に行こうとするところ危ない。最近、物騒だからな……結局、道場にあつたタオルに水を浸してそれを相手の頭乗つけてやつたのだ。既に意識は回復しているようで、相手は俺の膝

の上で覚醒した。

「男に膝枕した感覚はどうだ？俺はやっぱり女の子にしてもらいたいけどな」

目を覚ました相手に俺は声を掛ける。勿論、相手はぎょっとしていた。

「…………拙者は負けたのか？」

「ああ、お前は負けた。これでお前がストーカーになる」とはないな……よかつたな、一流のストーカーを目指さなくて……」

右足を勝手に見させてもらつたのだが、ああ、実に白くて美しい足だったと伝えておこう。白い足にあつたものは小太刀を当てたときに出来た青あざ。それは痛々しかった。ああ、やっぱこれって俺の責任だからな……

「悪いな、俺たちエンキリは勝てなきや意味がないんだ

「…………お前らには武士道といつものがないのか？」

「すまん、俺つてどっちかといつと忍者のほうが好きだ」

「…………」

負けたのが悔しいのだろう、焰華の頬には涙がつた。

「…………お前の敗因は慢心と技量不足」

「そうか…………やはり、拙者はまだ未熟だつたか…………」

「ああ、そうだ…………」

しんみりとした感じなのだが、俺は非常に眠い…………あちらの世界の人たちが俺を眠らせようとまぶたの上で不思議な踊りを踊り始めているのだ。ううん、正直言つてこのまま焰華に倒れこんでしまいたいのだが…………初対面の相手にそんなことしたら折檻ものだ。

「今日は…………もづ遅いから、早く家に帰れ…………負けたからつて切腹をするなよ？」

そろそろ夜も明ける頃だ……エンキリの仕事に決闘なんてないかも知れんが…………結構ハードなお仕事だつた。

「じゃ、最後に願いを聞いてくれ…………」

俺の意識が遠のいていくその間際、俺は焰華の言葉を聞いて適當

に頷いたのだった。人間、睡魔となく子には勝てないのである。

翌朝、気合と根性で起きるとさつさと学校へと向かつた。それは何故か……手野見さんがどうなったのかを知りたいからだ。人ととの縁はそんな急に変わつたりしないかもしけないが、念のためである。ああ、朝目を覚ませば俺の目の前には焰華がいなかつたことを伝えておこう。

早めに学校に登校すると、やはり学校に生徒の数は少ない。見た目がまじめな手野見さんの姿は既にあり、そんな彼女に一人の男子生徒が手紙を彼女に渡していた。

「よ、読んでください……お願いします！」

そういうて男子生徒は俺の隣を通つていき……その後にはぼさつとした手野見さんの姿が残され、俺はよかつたと思ったのだが……人生、そういうまくいかないようだ。

「……どうしよう、これ……」

手野見さんは俺に山ほど詰まれたラブレターを見てくれたのだった。

第八話 ホンキリと縁切りの違い

八、

ホンキリ・縁を切る一族が仕事をするときに自分たちのことを言うときに使う言葉。

縁切り：縁切りの仕事ではないときに使うホンキリの言葉。

この二つの言葉を理解できないという人のほうが多いのは俺たち、縁切り一族があまりメジャーじゃないからだろう。そりやそうだ、切れないと縁は腐れ縁だけ……そんな便利な一族がいればアイディア次第で何でもできるのだからな。

ホンキリというのが俺の肩書きならば……今、目の前で木刀を掲げている相手の肩書きはなんだらうか？

「……焰華、参る！」

「……」

ホンキリの隣の席の女の子……そんなところか？それとも、絶滅危惧種、こいつた特例を載せたレッドブックに載つている『剣道少女』といったところだらうか……

「おつと…」

ぼさりと考えていた俺の頭上に俺の頭を二つに分けようとする木刀が迫る。二つに分けられているのはお尻だけで充分だ！お知りが会つてお知り合い……なんちゃつて！

「……やりますね、師匠！」

「そりや、弟子になつたばかりの奴に負けたら師匠じやねえよ！！」

さて、何故俺が焰華の師匠になつたかというと……それは数日前にさかのぼる。正確に言つなら、手野見さんにラブレターが殺到した次の日だらう。

「ホンキリ、約束どおり拙者ともう一度だけ戦つてくれ！」

「は？」「

日曜日とは何のためにあるか……俺の場合は寝るためにある。気がつけば俺の部屋の前に焰華が正座をしており、その頭を地につけていた。

「…………話しが見えないんだけど?」

「…………この前、約束したではないか」

「したか?」

「したつけ、そんな約束…………

俺のそんな態度に少々眉をしかめながら焰華は立ち上がりつて俺に木刀を投げつける。

「ああ…………そのような態度では拙者よりも一歩年上とは思えない」「は？お前、俺と同級生じゃないか」

「そうだが…………飛び級だ」

俺の知能指数では飛び級なんぞ、無理だろ？な。ああ、カン二ングペーパーことカンペがあれば話は別だが…………

「とりあえず、来ちゃったものはしじょうがないから…………相手はするぜ」「

「かたじけない」

「負けたら俺の言ひこと何でも聞けよ?」

「そうすりやいろいろなことが出来るぜ…………」ヒヒ

邪悪な笑みがにじみ出していたことがわかつたのだろう。焰華は眉をしかめるとさらりと言つてのけた。

「ならば、拙者が勝つたら…………ヒンキリは切腹しろよ?」「ぐ…………」

「目がマジだ…………きっと、俺が負けたときは介錯してくれるだろ?いや、もしかしたら腹を切る前に首を飛ばされるかもしれません

…………」

「妥当だらう?」

「いや、死ぬだろ?」

「ひづなつたら交渉をすることにしよう。いかにしてこの相手を……

……「よほほ」なことをできる相手にするか……

「ああ、それなら……俺が勝つたらお前俺の弟子になれよ」

「弟子?」

俺がいきなり提案したことに首をかしげている。

「そうだ、焰華強くなりたいんだろ?」

「まあ、それが武士の本懐だからな」

よし、ここまで納得させることが出来たな……

「だから、強い相手の下につければ強くなれるだろ?」

「ならば、エンキリ……おぬしが負けた場合は拙者の弟子になるのか?」

「勿論だ、お前ほどの腕があれば弟子の一人ぐらいいても問題じゃないだろ?」

「…………わかった」

勝った!俺はそのとき確信した……くくく……師匠が弟子に色々と教えてやるぜ そう、いろいろとな……まあ、その後は俺が勝つたわけなのだが、実際はそつまくはいかなかつた。何故かつて?そりや、色々と事情があるのだ。

朝の練習が終わり、焰華と共に学校へと向かつ。あれ?メインヒロインは手野見さんじやなかつたのか?ああ、あの入つて実はサブキャラ?

「師匠、どうかしましたか?」

「いやいや、何も……ちょっと焰華と手野見さんの立ち位置を考えてただけだ。実際のところはどうなのかと思つたんだけどな……まあ、いいや……気にするな」

「はあ、そうですか?」

こいつを弟子にしたのが間違いだつたことに気がついたのは弟子にしたその日からだ。二畠には

「修行しましょう!」そして、二畠には

「決闘しましょう!」これはもつひとつ考へても頭の中がお花畠並み

の危ない存在だ。寝首をとられそうになつたことはまだないが、箸を渡そとすれば

「勝負の合図かと思つた」と口を開いて言つて……とつあえず、棒状のものを俺が掴めばこいつは

「決闘のサインだ！」と頭が認識するらしい……相当、殺伐とした家で生活してきたのだろう……しかも、俺の家に泊まりこみを決行しやがったのだ。俺が後できることといえど、こいつをさっさと破門にするか……免許皆伝の証をさつさとやつちまえれば縁を切ることが出来るだろう。エンキリなんだから縁を切ればいいと思う方もいるかもしだれないが、エンキリ一族の撻では

「自ら招き寄せた縁の糸を断ち切つてはいけない！」と決められている。もつとも、俺の場合はまだ自分の円の意図が見えていないといつことがあるのだが……

「師匠！ 不良を見つけました！ 成敗しに行きましょう！」

「お、おい！」

「成敗！」

「ぐはっ！」

「……」

正義感が強いのか、ちょっと目を離せばまるで正義の味方のように悪党を懲らしめにこくのだ。見た目が不良だという偏見だけで焰華は裏い掛かるのである……ちなみに、先ほどの見た目不良の少年はポケットに手をつつこんで歩いていただけである。

「成敗完了！ 拙者がいる限り悪の芽など根絶やしにしてやる……」

木刀を片手にポーズを決めている焰華の頭にチョップを入れる。

「あんぽんたん！」

「あいた！」

「一般人に暴力をふるうな！」

「む？ なぜです？」

「なんだ正義感だ…… 正義の味方といつものは悪者が何か悪さをしなければいけないものなのだ。暴力を一方的にふるうなんてちょ

つとやばいだろ？ はあ、弟子が間違った方向に進んでしまつたら
それは師匠の責任なのだ。

「いいか、こいつが何をしたんだ？」

「悪そعدした」

「それが成敗理由か？」

「そうです！」

「おーおい、そりゃ駄目だろ？」

「なぜです？」

あ～もう、こいつはあれだ、その、何だ……自分が正義、力が正
義と思つてゐる節があるぞ……

「とりあえず、学校に行つてきつちり教えてやる！」

俺は焰華を掴んで引きずつて学校に行くことにした。

午前のよく晴れた日……それは新たな話の始まりだったかも
しない。

第九話 ハンキリと親戚（前書き）

久しぶりの更新となりました。忘れちゃっている人はお手数ですが
初めから見てくださいね 感想、メッセージどちらもぜひ送つても
らいたいと思います。

第九話 ハンキリと親戚

九、

家族がいればやはり、親戚というものがいるのは自然だ。勿論、俺にも親戚というものが存在しております……俺より年下が何人かいる。一番年齢が近いのは一歳年下なのだが、変わった連中が多いのはやはり、家系だろう。その親戚も変わった人物で……金持ちとの結婚を破棄。ずっとたずたず縁の糸を切断したそうだ。最後に会ったのは

……一年以上前だろうか？

『二年三組縁切霧耶君、ご親族がおいでです。今すぐ職員室まで来てください』

「ん？」

学校でこのように放送された人はわかると思うが、こういうものは他人の注目を集めるものだ。それがイケメン転校生ならばなおさらだろう。

「縁切、寝癖つけながらポーズとつてないでさっさと職員室に行つたらどうだ？しかもなんだ？何で窓から出ようとしているんだ？」

「ばれちまつたか……俺は理由を友人Aに述べる。

「おいおい、俺みたいなクールガイな転校生が廊下を歩いちまつたら前女子生徒がときめいちまうだろ？ハートを狙い撃ちしちまわなによつにしのんでいかねえとな」

「……焰華、あんたの師匠になつた人つて馬鹿じゃない？」

「むう、師匠は違つた考え方の持ち主なのだ」

「おい、焰華……なにやら悲しそうな目をして俺を見るな！」

「つたく、走つていけばいいんだろ、走つて……」

俺はそのまま廊下を颶爽と走つてかつこよへ職員室に行こうとしたのだが……

「こらあ！廊下は走るな！――」

「…………すんません」

先生に怒られる羽田となつたのだった。

職員室に着いた俺に担任の先生が告げた。

「遅いですねえ、何をしていたんですか？」

「いえ、ちょっと先生にわからない問題を教えてもらつていました」
先生、ボクは学校の廊下が箸つてはいけないということを知りませんでした！

「まあ、いいでしょ…………放送でも行つていた通り、あなたの
ご親族の方がお見えになられていますよ」

「誰だらうか？俺は扉の前でふと考へる。

うつむ、誰が来たによつてか俺の今後の学園ライフがかわつちまう
かも知れん。親父：ありえないな、あの人物が迎えに来てくれると
は思わん。母さん：重ねてありえないな。姉さん：いたずらにでも
来たんだろうか？爺ちゃん：来たのなら俺を連れて行こうといや、
逝こうとするのだろうな。ばあちゃん：俺に制裁を加えに来たのだ
ろ？。

どれもこれも穏やかなものではなかつたので俺はひやひやしながら
職員室の扉を開けたのだった。

「あ…………」

そして、俺の目に映つた人物は上の人物たちとは一応関係を持つ
ている人物でもあつたのだがあまり関係が無いといえば関係が無い
というような感じの人物だつた。

例えるのなら？遠くに住んでいる親戚つて所だらう…………まあ、そ
のまんまなのだが。

俺の眼に映つたのは俺の親戚、古那優ふるなゆうだった。

「…………どうも」

「あ、ああ……」

言いにいくといふか、非常に恥ずかしいことなのだが俺はこの一年年下の女の子が非常に苦手だった。これまで会話が成立したことなど一度もなく、だんまりを決め込んでしまえば絶対に口を開いてくれないような人物だ。そういう人物が苦手な俺としては会つだけで顔色が悪くなるのは必然だ。

「……先生、先ほど説明したとおり霧耶さんを連れて帰ります」

「ええ、どうぞ」

先生に頭を下げて優は俺の手を掴んで職員室を出て行く。当然、手を掴まれている俺も一緒になつて職員室を出て行き、そのまま廊下を歩くことになった。このままでは黙つたままでリードされてしまい俺は気がついたらかけの上から落とされていったような状況に陥るかもしれない！そんな馬鹿なことを考えながらも俺はとりあえず動きを止めることに最善を尽くすことにしたのだった。

「な、なあ、今日は突然訪問してびっくりしたんだ？誰かの葬儀か？」

「……用があつたんです」

「ええと、何だ？」

そうたずねるとまるでほこりをみるような視線をぎりぎりなく俺の目に合わせて告げた。

「……先日、エンキリー一族上位十名に名前が入った

「へ、へえ……つてなにい！？何位だ？」

「六位……」

6とは1、2、3、4、5の次に来る数字である。

さて、そんなことはどうでもいいと思つてゐる読者の皆さんには覚えているだろうか？俺は第5番目で7、8、9、10の連中が俺のことを監視していると以前言つたということを……第6番目の説明を忘れていたのだが、第6番目の席は開けられていた。

順位を決定するには半年前からの準備をかけて儀式が行われるのだ。その儀式で見事に成功すれば見事順位を勝ち取ることが出来るのである。ちょっとおかしい話だが自ら順位を抜けるといわない限りその順位は変わらぬままである。まあ、うちの一族はプライドが高い

がそういうところはきちんととしているので自分の力が弱くなつたと
知るにすゞり自分の位を下げる傾向があるのである。

「つまり、6位となつた優は……」

「……霧耶さんのお目付け役となりました」

「おめ、お目付け役！？」

監視者との違いはいちいきつゝじんでくるところだらうか？もと
もと、この古那優というエインキリは一族の中でもずば抜けた能力を
所有しており、宗家の人間ではないが能力だけどこまで上り詰め
たといつても過言ではない。古那家とは親戚と言つていたが遠い親
戚であり、血がつながつてゐるのかさえ怪しまれていたりもしたと
いうほど疎遠だった家系なのである。

「…………で、でもお前この前許婚との一件で無断外出とか駄目にな
つただろ？何でここにいるんだ？」

俺と同じように優は自らの許婚との縁を切り裂き、その結果俺と
は違つて家に軟禁されていたそつだ。反省文を用紙何百枚か書かさ
れたと聞いている。

「…………終わらせました。その結果、私はあなたのところに心を入
れ替えたものとしてあなたを諭すように言われてやつってきたのです
」

「…………」

「…………実際のところはあなたによつたことはしません。ですから、安
心してください」

珍しく優にしてはしゃべつてゐるまづいだらう。昔は

「うん」とか

「はい」とかしか言わなかつた。ああ、そういうや一度も否定をした
ことなんて無かつたな。

「本当にそれだけのために来たのか？」

「…………鋭いですね、実のところはそれだけではありません。霧耶
さんのお姉さんが後ほど仕事を持つて霧耶さんのもとへとやつてくる
予定です」

なるほど、実力者ぞろこのところへ姉さんが仕事を持つてくるの

か……つて！

「ね、姉さんがこっちに来るんだって！？」

俺はたまらず優の両肩を掴んで顔を目一杯近づけて優に尋ねる。
普段は眠たそうにしている両方の目が最大限まで開かれており、意
外と大きくてくりっとしたかわいい目であることが判明した。

「…………え、ええ…………そのように伝えておいて欲しいと、だから
霧耶さんが相対できるようここここまでやつてきたんです」

「そうか、ありがとう……」

俺の姉さんは非常に風雅人で、部屋を散らかすのが得意という姉
さんはクリーンで清潔感あふれるこの俺にとつては天敵のような存
在なのである。ましてや、あんなだだつ広い家にきちんと

「お姉さまの部屋」と扉の前に張り紙を張つて上げなくてはあの人
は家中を間違いなくごみにしてごみ屋敷にしてしまうだろう。

俺は優の手を掴むと町内の清潔と俺のクリーンで最高なイメージ
を守るべく、昼からマラソンを開始したのだった！急げ、俺！俺の
清潔は俺の両肩にかかっているのだ！

第十話 ハンキリと優のお料理

十、

古那優、俺より下だから…………ええつと、年齢は十五、六だろう。年齢よりも下に見られたりすることがよくあり、それは外見上幼いからであろう。

元来、寡言なところがあつて人見知りもするのか、正月なんか田を合わせただけで下を向くような子だった。姉さんとかにもなつくことなく、ただただ俺の近くにいて俺が他の人と遊んでいるのを優がじーっと眺めているといったことも幾度と無くあつたな。そんな優がもつてきた知らせ、いつかわからんが恐怖の大王がピンポイントで俺の家に舞い降りるそつだと聞いたのは午前中のことだった。

「師匠、今日はお祭りでもあるのですか？」

時間帯は夕方、忙しい主婦の方々は夕飯の買い物などに勤しんでいる頃合だらう。

「いや、違う…………俺の姉さんがくるんだ」

「姉さん？ 师匠の姉上ですか？」

「ああ」

「なるほど…………客人を迎えるために掃除をするのは思えば当然の行為ですね」

「ま、そういうことにしておいてくれ」

ひと段落つき、焰華の隣の部屋に

「偉大なるお姉さまのお部屋」と書かれた看板を取り付ける。うん、これでなんとかいいだらう。

「…………霧耶さん、こちらも終わりましたよ」

「い」苦労さん

「…………師匠、この方が師匠の姉上ですか？」

きょとんとした表情で焰華は優のことをみている。そういえばま

だ紹介してなかつたな。

「ああ、この子は俺の親戚の子で古那優って名前だ。今日から居候する予定だそだから仲良くしてやつてくれ」

「…………古那優です、よろしくお願ひします」

「拙者の名前は菅野川焰華と申す。こちらこそよろしく…………」

両方とも頭を下げてうまく挨拶をしているようだ。さて、今日姉さんがくるかわからないが一応、夕飯は姉さんの分も作つておくことにしよう。

「さ、二人とも夕飯作るから手伝つてくれ」

「了解しました」

「…………わかりました。お一人は私のサポートをしてください」

俺と焰華、そして優の三人で調理場に立つた。今日の献立は姉さんが来るかもしれないというので普段よりも豪華なものを作ろうと決めていた。普段は精進料理を焰華が勝手に作つてるので冷奴やら山菜の煮つけなどだけだつたが久しぶりにうまいものでも食えそうだと期待していたのだが……

結果を言おう、三人で出来た料理は酷いものだつた。

「こげた魚にこげた肉料理…………炭のサラダつてところだらうか?」

「いえ、師匠…………これは火事場の料理のフルコースといったところでしょう?」

優に聞こえないように俺たち二人はささやきあつた。

「…………」

言いたくないが、原因は優にある。

普段から料理をしていなかつたのだろう、だからはつきり言つて足手まといもいいところだつた。

俺たち二人は最後まで優を信じてサポート側にまわつたのだが、結果は大きく裏切られるものとなつたのだ。

久しぶりに会つた…………というか、殆ど話なんてしたことのなかつた相手を責めるのもなんだか心苦しかつたので俺は黙つて、焰華も同じように料理をしたのだ。その結果、連帯責任なのか、はたまた

厳しい愛情を優に注がなかつたためか、とりあえず食つのも一苦労というゲテモノ料理が出来てしまつたのである。ちなみに、姉さんだつたら何でもおいしく食べててくれるだろ？

「と、とりあえず……」

処理するか、食べてしまふかのどちらかを選択したほうがいいだろ？前者を選べば優が間違いなく傷つくであろうが俺たち三人の健康は損なわれないだろ？そして、後者を選べば優の心は救われるだろ？が、俺たちの健康は救われない。

「し、師匠……」

アイコンタクトを送つてくる焰華に對して俺はどう対応すべきか困つていた。勿論、心も大事なのだが体も大事だ。

「……食べないんですか？冷えでしますよ？」

優は既に“これ”を食べる氣でいるようだ。

「し、師匠！」

焰華は俺に訴えかけてきている。これなら焰華の精進料理のほうがまだましだろう、いや、月とすっぽんの違いがあるはずだ。

「……焰華、武士たるものどのように敵にも臆せず、つっこむのが道理……」

「で、ですが……」

「確かに、ただ敵軍につつこんでこくようなものは武士とはいえない。昨日の敵は今日のともつてこともありえるからな……この敵たちは見た目はワイルドでとげとげしているかもしれないが、……意外と心優しいもの達かもしれない。見た目で決め付けるな、終わつた後にあれもいい体験だつたなあつて思えればすべてのことが救われる！」

俺は自分の分の箸を手にとつて焰華に告げた。

「我に続け！世界は終わりを求める！真理とは常にそこにあるものなのだ！！」

「わかりました！！」

自分でも何言つてゐるかわからなくなつてきたのだが、俺は無我

夢中で食事を始めたのだった。

「「いただきます！！」」

俺と焰華は相手に対して宣戦布告し、箸という一本の太刀を持って敵軍の中に突っ込んでいったのだった。

「ぐはあつ……」

世の中には…………恐るべき敵が数多存在するということを久しぶりに知った。俺の舌は既に未知との遭遇で混乱状態。うまく呂律が回らない上にその舌には宇宙が存在するかのようだった。そして、師匠と弟子という関係上の焰華ともその後に一戦交えたのだった。

「し、師匠…………」

「ついでに言うなら腹痛もだけどな」

ここにくるまでには様々な障害があった…………ここは一応俺の家なのでなんとしてでも所有者として焰華には勝ちたかった。この古臭いぼつとん便所の最初の所有権を手に入れたのはそう、俺だ。

「し、師匠、は、早く変わつてください！何かが生まれそ娘娘です！！」

「そうか、俺は今出産中だ。あ～死ぬかとおもつたあ～」

「拙者、し、死んでしまう可能性が出てきました！！」

生まれ行く混沌たちに俺は別れを告げて涙目になつていた焰華に聖域の権利を渡したのであった。

「ふう、なんとかこれで死にそうには無いな」
立ち上がりつて優のいる台所へと向かつた。

「…………料理、どうでした？」

はじめてあつたときとまったく変わらないどこか眠たそうにしている田をこちらに向けてくる。さて、どう答えたものだろうか……

「…………あ～あれな、ちょっと…………まずかった」

「まずかった…………そうですか…………」

あからさまにがっくりきている優に対して、俺はあわてて付け加える。

「いや、そうじゃなくてあのタイミングで酢を入れたのはまずかつたって意味だ！」

「なるほど、精進します」

メモ用紙を取り出して、優はなにやら書き込んでいた。

「……霧耶さんは料理が出来るのですか？」

「ん？ まあな

俺の家人たちは多忙で、ちょっとした料理ぐらこなら（姉さんを除いて）誰だつて出来る。これはずつ、生きてこいつてやるべきことだからな。

「では、焰華さんも？」

「ああ、料理は作れる。普段焰華が作ってくれてるからな」とつてもヘルシーな料理をな。

「……なら、私は料理で霧耶さんを超えて見せます、覚悟してください」

なんだかよくわからないまま、俺は優に宣戦布告されたのだった。

第十一話 ハンキリ姉、降臨

十一、

世界つてものは広いのか狭いのか、俺にはわからない。
広いと思う人がいるのなら世界は広い。

狭いと思つ人がいるのなら世界は狭い。

つまるところ、この世界の大きさを決めるのはその世界に住んで
いる個人個人のものさしで決められるってことだらう。

俺？俺にとつてこの世界は…………今、ものさしあてて考へてる
途中つてところだ。

「ああ、今日も一日よくがんばった…………あの退屈な数学の教師の
時間を見事に耐えて見せた俺に皆、盛大な拍手を送つてくれ

「…………霧耶さん、霧耶さんは早退しましたよね？」

「…………焰華、お前の師匠はよくやつた…………そうだよな？」

「いえ、師匠…………今日の師匠のがんばり具合は生まれたて小鹿以
下だと思います」

そりやそうだ、小鹿は生まれてすぐに立つ練習をしないと肉食獣
に食べられちまうからな…………おっと、冷静な突込みを入れてい
る場合ではない。

あれから…………そう、残飯処理と思われるような行為を三人で終
え、俺たちは俺、焰華、優の順番に風呂に入つて風呂上りのまつた
りとしている時間を過ごしてるのである。本当だつたらこの時間
は焰華と稽古をしている時間なのだが、姉さんについての予備知識
が無い焰華には姉さんの取り扱いについて教えるという時間が必要
だつたのである。決してさぼりではないということを付け加えてお
こづ。

「…………して、師匠の姉上とはどういった方なのでですか？」

「そりゃ、俺の姉さんだから…………」

「…………一言で言つたら変人ですね」

「おいおい、優……それじゃ俺も変人みたいじゃないか?」

「ああ、なるほど……」

「焰華、俺を見て頷くな。俺から言わせたらお前ら一人とも変人だからな。」

「ともかく、俺が不在のときに姉さんが来たら…………まず、茶菓子とお茶を必ず準備しろよ? へたすりやお前が食われるぞ、焰華。お前、おいしそうな感じだからな…………」

「霧耶さん、変態ですね」

「うん、実に夜に楽しみたいおいしそうな体つきだつて……」

「優、俺は残念ながら初対面の相手でも家から放り出すほどの凶太い神経は持つていないが、適当なことをいうと明日の朝からの食事はインスタントになると心がけていてくれ…………ともかく、食われるかもしれないから気をつけるとは優、お前にも言つておくぞ」

大真面目に告げる俺に優は

「わかりました」とだけ言つて自室へと戻つていった。
それに対して焰華は首を傾げるしかないようにようだつた。

「食われるつて…………まさか、化け物か何かなのですか? エンキリなんですね?」

「ま、れっきとしたエンキリなんだが…………ちょっと特殊な感じですね…………縁を切るのがエンキリなんだが…………俺の姉さんは他人の縁を吸収するっていうありえん能力が付加されているんだ」

ゲームで言う特殊能力だろう。

まあ、エンキリっていう能力も充分特殊能力だと思われがちなのだが、魔法使いだと思つてくれ。

連中は魔法を使って攻撃するが、それ自体は不思議なことじやないだろう。だが、姉さんを魔法使いにするなら、まず攻撃して相手の体力を減らしたあとに一度に状態異常と姉さん自信の体力を回復した上に体力の最大限を上昇。さらに攻撃力や防御力なんかあげちまうという勇者もびっくりなスキルを所持しているのである。

「正直、姉さんは恐いぞ…………」

「そ、それほどとは…………」

さりに、俺は姉さんの怖いところをあげることとした。敵と戦う前には相手の情報を押さえておくのは常識だろう。

「まず、部屋を散らかすな…………ちょっとの間、一人暮らしをしていたんだが…………半年後には役所とかテレビ局とかが姉さんの家に来てた。モザイクでテレビには出てたぞ」

「それって…………散らかしそうな人なんですねよ？」

恐る恐るといった感じで聞いてくるが、俺は頷いた。

「ああ、『み屋敷に早代わり…………どういったマジックで』みを増やすのかわからんが…………一田に十キロ近くの『みを家に持つてくるんだ。これは恐ろしいぞ…………』」

「…………『ゴキとちゅ～が夜中徘徊してそうですね』

「いや、姉さんはそういうのが苦手というか、嫌いみたいでな…………」

発見しだい、生体反応が消えるまで戦い始めるぞ…………これまでの戦いの中で姉さんから逃げ切った連中は一匹もいない

「…………発見され次第、天国逝きか地獄逝きの列車に駆け込み乗車ということになるんですね？」

さらに徹底しているのが発見されたあとは『ゴキホイなどがゴキがあつまつてそうなところにたくさん設置されてたりする。

「ま、そんなところだ…………あと、どんなところで生きていけると思ひ」

「ど、どうと？」

「さつき俺たちが始末したあの真っ黒な炭みたいなものでも平気に食べる…………てか、おいしそうに食べてくれるぞ？俺が小さい頃に初めて料理を作ったときに家族みんなに食べさせたんだが姉さんががおいしく食べててくれたからな…………」

「へえ、どんなゲテモノ料理でも大丈夫なんですか…………すごいですね？けど、師匠はそこまで料理下手じゃありませんよね？むしろ、上手ですよ？」

誰だつてはじめはへたくそなのだ。

「ま、そのおかげである程度まで料理が出来るといつことになつたんだが……姉さんはカビが生えていよつが、不思議なきのこが生えていても食べちまうからな」

「…………本当にすごい人ですね」

「ああ、ある意味超人だ」

「けど、性格とかはいいんですね?」

「性格か……」

姉さんの性格……それはちょっと掘みづら」ところだらう。

「ま、人によつて態度が変わつて言つたほうがいいだらうな

「え、なんですか、それは?」

「自分に敵対する相手には厳しい…………てか、修羅。自分に優しくする相手にはとことん甘える。ああ、先に言つておくが『おねがい、やつて』とかそういうレベルじゃなくてまるで下僕扱いだな」

あ～今思えばこうやつて一人暮らし出来てほんとうによかつたかもしけん……いや、焰華と優がいる時点で一人暮らしじゃねえな。俺が考え込んでいるとどうやら焰華も考え込んでいるようだつた。う～ん、実際に会つてみないとわかりませんね…………ただ…………

「ただ…………なんだ?」

「強いんですね?」

「勿論だ、あれに勝つには鍛え抜かれた連中を一個師団持つてきて対等…………いや、一国と対等に渡り合つかもしれん」

「へえ、霧耶…………あれって誰?」

「そりや、うちの姉さんだ…………

ベタだとは思ひさ…………だが、姉さんの特殊能力を忘れていた……

「二、この人が?」

「ね、姉さん…………」

「霧耶、先を続けてくれて結構よ」

大人びた顔に抜群のスタイル…………だが、何故か忍者の格好を

している……漆黒の髪の毛はボーネールになつており、瞳は強い光をたたえている。

「焰華、紹介しよう……この人が俺の姉さん、縁切節佳だえんきゅうせつか」

「は、はじめてまして……せ、拙者は……」

辺り一帯には禍々しいフレッシュヤー……焰華はそのフレッシュヤーに押されたのか、裏声で自己紹介を始めた。

「へえ、焰華ちゃんか……いい手足となつてくれそうでお姉さん、嬉しいわ」

「ど、どうも……」

姉さんは一言やういふと姉さんの自室へと引つ込んでいき、俺たち一人は立ちすくんだ。

「た、たつているのも大変だつた……あれは敵にまわしたくない」と語つたのは初対面の焰華の感想だ。

第十一話 ハンキリ姉、降臨（後書き）

久しぶりの更新となりました。実は、この姉さんの話で縁切は終わりにしようかなって思っています。

第十ー話 Hヤヤコと動かすつた縁（漫書セ）

そろそろ終わりも近づいてきたなあと感ひてますが、面白ことかい
う感想がきたらひょいと手を伸ばすつかなあと考えてます。出来た
ら感想のまつをよろしくお願ひします。

第十一話 ハンキリと動を出した縁

十一、

ゲームやつててどう考へてもラスボスに勝てなかつたりする。いや、その前にラスボス前の敵に勝てなかつたりするのが俺なのだが、正直言つて姉さんはレベルが低からうが、武器が弱からうがまづ、勝てる。

何故かつて？そりゃ、おかしいことが起きるから。敵の攻撃とか表示はされるのだが、攻撃は外れてしまつたとかそういうのが出る。恐ろしいほどの運の持ち主なのだ。アクション系のゲームだつたらありえないほどの腕前を見せてくれるのだ。

そんな俺の姉さんがやつてきた理由、それは弟の平安をただ壊しに来ただけじゃなかつた。

起きた姉さんがすること、まずは顔を洗う。

「…………ふう、これでおきたつて実感するわね…………」

「…………先に顔洗つてた俺を庭に放り投げるのは勘弁してくれ…………」

…
そして、次に飯を食べる。

「霧耶、じ飯がやわすぎよ。私は固めのじ飯が好きなの。味噌汁はちよつと辛すぎだわ」

「…………その割には両方とももう五杯目…………」いや、焰華と優の分は俺の分を減らしてやるしかないか…………」

そして、最後に……

「ふう、おやすみ…………毎日はんになつたら起じしてね
「…………」

ちなみに言つたが、俺が目を覚ますのは四時半だ。姉さんも同じ時間に起床。ちなみに焰華は五時ぐらいに目を覚ましてまぶたを擦ることなく、しっかりと歩調で起きてくる。

「おはようございます、師匠…………あの、なんだかげっそりとしてますか？まだ節佳さんは起きてないんですか？」

「…………あこにぐ もう寝ちまつたよ…………」

「これはもう、夏場の通り雨以上に質が悪いとしかいえない。」

「は、はやいですね？」

「まあ、な…………」

優が起きたのは七時半…………しかも、パジャマは着崩れを起こして田を擦りながらウサギさんのぬいぐるみを抱いていた

「…………おはようじでこます」

「ああ、おはよう…………」

今日が休みではなかつたらまず間違いなく遅刻だろ。既に焰華は木刀をもつて道場で素振りをしているだろ。

「…………味噌汁ですか…………朝はいりません」

席に座つたのを確認すると俺は「こ飯と味噌汁を優の前に出してやつたのだが、それを優は不機嫌そうに要らないとのたまつた。

「ああ？味噌汁のまねえと力がでねえだろ？が？」

「…………納豆だけで結構です」

何故、優が納豆だけを頼むかといふと、若手のエンキリは納豆の糸をうまくたききることが出来れば将来有望だと考えられているからである。ほんとうかどうかはさっぱりなのだが、俺たち一族はこの話をマジで信じている連中がけつこうしているのだ。

「…………田をあけたくありません」

「つたく…………ほり、口開ける。あ～ん」

「…………あ～ん」

「冗談で言つたつもりだったのだが、優は俺に言われるまに口を開けた。しうがないので俺は箸を使って優の口の中に入れてやることにしたのだった。

「…………まあまあおいしいですね。私の作った味噌汁に比べると味は落ちますけどね。今度作つてあげますよ」

「ははは…………それは期待して待つておくよ」

できれば姉さんがいる間にお願いしたい。

そんなやりとりをしていると焰華が戻ってきた。

「……師匠、今優が起きてきたのですか？」

「ああ、そうだ」

「……………エンキリ一族とは変わっているのですね」

おそらくは俺のことを比べて言っているのだろう。優は食べ終えてからウサギさんを引っ張つてどこかに消えてしまった。

「ま、個人個人でばらばらなのが俺らの一族って感じだからな」

「……………師匠、稽古、付き合つてください」

「ああ、わかった」

その後、午後になるまで俺たち一人は道場で稽古試合をしており、優と姉さんは午前中一杯、一度たりとも姿を見せなかつた。

「姉さん、ご飯が出来た」

「……………ん、わかったわ」

Tシャツ一枚という他人には見せられないような姿でベッドの中から這い出してきた姉さんに着るもの渡す。

「どう? この洗練された体に見入つてた?」

「いや、確かに男だつたら見入るかもしれないけど性格知つている俺は見れな……………ぐはっ!…」

「ご無体なけりが俺の腹にヒットして廊下の壁にヒビを増やしてしまつた俺だった。

姉さんだけが満足のいく匂いほんを追え、匂からじこに遊びにいこうと考えていたのだが……………

「霧耶、仕事」

「仕事? 仕事は今のところもつてないけど?」

「私が仕事持つてきたの。霧耶に解決してもらわないと」

そういうて引き止められ、焰華と優も仕事場であるテーブルの前に三人で並んで座つた。

「今日の午後一時、ここに一人の依頼者が来るわ

「依頼者？」

「そう、私に依頼が来てるんだけどちょっと大変でね……ここに来た理由は仕事を霧耶にしてもらうためなのよ」「なるほど…… そうなのですか」

「…………」

焰華はそういうがこれはおかしい。大体、姉さんのほうが実力が上だし、俺がいても邪魔になるはずだ……

優もそう思ったのか、姉さんに尋ね始めた。

「節佳さん、何故ご自分でなさらないのですか？」「何が重要な意味があるのだろう、きっと……」「めんどういから」

「それ重要じやないよね、姉さん」

「誰が重要な意味があるっていったのよ？」

頭がおかしいんじゃないの？ って顔をしながらこちらを見てくる姉さんに対して俺は呆れるしかなかつた。

「あのさ、難易度は？」

「ん~…………五つ星つてところかしら？」

ちなみにエンキリー一族では最高で三つ星である。

「ねえ、それってやつぱり俺じゃ無理なんじや……」

「うつさいわね！ 人の縁を切つてなんぼの私たちよ？ 特に、まだ結婚相手を見つけたくないって逃げ回ってるあんたを助けてあげるには皆に実力を示さないといけないの……これはあんたのためなのよ」「そ、そこの？」

てか、姉さんが俺のことを何気に考へてくれているなんて知らなかつた……

「いい？ 絶対に一回の断ち切りで縁を切つてしまわないと今度は霧耶に関わりを持っている皆に被害が及ぶわ」

「…………」

なにやらシリアス展開になつてきた姉さんの口調に俺はつばを飲

み込み焰華は固まつ、優はせんべいをかじつて舌をかんでしまつた。

最終話・Hンヤコと繩（繪書モ）

今回で終わりになりましたー皆さん、応援ありがとうございました！

最終話・H・ンキリと縁

最終話

自由とは何か……俺はそれを考えたことがあるのだが、結果として出てきたものは『自分自身にとつて都合がいいこと』だった。それを他の友人……依然いた場所のだが……にどうだらうかと伝えたところ、それは違うといわれてしまった。あいつに言わせるならそれは『勝手気ままにわがままを押し通しているだけ』ということらしい。それなら自由とは何なのかと俺はそいつに尋ねたところ、そいつは『少しの束縛があつてこそ、自由は存在する』と言つていた。

午後二時、約束の時間帯にやつてきた人物は一人の男子高校生だった。

「あれ？ 時雨じゅねえか？」

「ああ、やつぱり霧耶君だつたんだね」

覚えているだろ？ か、天道時時雨という少年を？ 俺？ 俺はきちんと覚えてますとも……

「姉さん、時雨が依頼者なのか？」

「そうよ、あんたなら学校でこの子の縁の糸を覗たでしよう？」

「まあ、みたけどさ……」

今も覚えているのだが、近くにあの小さい女の子も一緒にいるだろ？ 姿を見せていないところを見ると只者ではないはずだ。

とりあえず時雨を仕事場である応接間に連れて行き、お茶を焰華に出してもらつて俺は茶菓子を準備する。

「…………霧耶さん、あの時雨って人只者じゃないですよ？ 幾重にも常任が持つていない縁を持つている気がします」

高級和菓子店の箱を取り出してやつぱり戻していく優に俺は告げる。

「おこおこ、あちんと出せよ? やっぱり、あれはおかしい縁だよな けど、仕事上詮索禁止だから時雨が何者かは調べないほつが身のためだろ?」

「そうですね」

エンキリ一族はプライベートなどに口を挟んだりしないのが当然だ もつとも、どこの会社もそんなもんだらうが、ことエンキリ一族は勝手に相手のこと調べよつとするなりばマジで首が飛ぶか行方不明になつちまつ。

「きつと、節佳さんはあの縁の糸を切れなかつたんでしょう?」

「 どうだらうな、相当あれは骨が折れそうだ」

骨が折れるどじつか、自信が折れちまいそうだと思つたのは内緒だ。

「で 時雨の依頼をきちんと聞いてなかつたな」

「ああ、そうだつたね 縁を切る一族、エンキリ そのエンキリである君に依頼したのは妹のことなんだ」

「妹? お前の」とじやねえのか?」

「え? 違つよ」

てつきりこのぶつとい縁の意図のことがと思つていたのだが、違つたようだ。けどまあ、実は時雨の妹さんも時雨以上にぶつとい糸があるかもしれないからな。そつちをきつてもらいたいのかもしないな。

時雨の表情は真剣そのもので、張り詰めた空氣はただそこにあるだけで世界を止めてしまつのではないかといつ錯覚を俺に与えてくれた。

そして、時雨の口が重く開かれる。

「 実は最近ね つちの妹にやたらと男が話しかけてくるんだ!」

「ええええい! これまでのちよつとしたシリアスな空氣を返せ! 」

「霧耶さん！－ちょっと何してるんですか！－」

「師匠！丸腰の相手に襲い掛かるのはどうかと思います！－」

俺は焰華と優に押さえられて動けなくなつて、姉さんはずっと静かにお茶をすすつてゐる。

「…………で、まとめると依頼内容は？」

「簡単だ、うちの妹の男の縁を妹に内緒でスライスしてほし……きりきりのところまでね」

「ふう～んそうかい…………ところで、今日妹さんはきてるのか？」「来てないけど…………やっぱりつれてきたほうが良かつたかな？」つれてきたら内緒じゃなくてばれちまうだろ？…………とぐだぐだ言つている場合ではない。俺に出来ないことはない！報酬さえもらえば俺の力で何とかして見せるぜ

「…………というわけで姉さん、力を貸して？」

「さつきの文と逆のことを言つてるわよ…………と、いいたいといつたが今回はアドバイスをあげるわ」

「アドバイス？」

あな珍し…………あの姉さんが俺にアドバイスをくれるなんてこれは天変地異の前触れではないか？

姉さんは立ち上がり歩き、とあるところで立ち止まった。

「…………焰華が優を使えばいいじゃない」

「…………それ、本気？」

「本気本気……」

顔がにやついているところを見ると怪しいものだが…………これはしょうがないだろう。

「…………あの、師匠…………どうしたことですか？」

「えつとだな、エンキリが縁を見ることができるのは知つてゐるだろ？それで、ある程度の実力者なら遠隔に相手の縁を切ることが出来るんだ。けどな、それをするにはその相手と知り合い…………つまり、縁を少なからず持つてないと切るのはちょっと難しいんだよ」

「しかし、拙者も知りませんよ？」

もつともなことを言つたが、俺の話は終わっていたわけではない。

「ああ、それは知ってる。だからだな、縁切りってのは縁を強く結ぶ相手がいれば力を増すことが出来るんだよ。エンキリが切ることの出来る縁の糸の太さは実は決まってな、それは自分が結んでいる一番太い縁の糸と同じ太さが限界なんだよ」

「…………？」

理解して無いだろう……この顔は……まあ、簡単に言うなら「俺のことを信用していると思われる人物がいてくれれば俺はエンキリとしての力を高められるってことだ」

「ああ、なるほど……それなら、拙者に任せてください！」すつと立ち上がり胸を叩く。うん、実に頼もしい味方なんだが……姉さんがにやけているのが非常に気になる。

「そんじゃ、はじめますかね……焰華、悪いが俺の左手を握ってくれないか？これから、ずっと、ずっと俺のことだけを考えていってくれ」

言つていてかなり恥ずかしい台詞なのだが、いつでもしないと俺は力を増すことが出来ない。

「承知しました！」

既に差し出していた俺の左手を焰華は掴み、目を瞑る。きっと、精神を集中しているのだろう。

「霧耶君、顔が赤いよ」

「うつせえ！……じゃ、はじめるぞ……」

俺も目を瞑り、時雨の縁の糸をたどつてゆく……こんなことをめつたにしないのだが今回はいたつて簡単に時雨の妹と思われる人物の縁の糸を発見できた。

「さて……と、まだ見ぬ時雨の妹さん、悪いがこれもお仕事なんですね」

俺は右手を振りかぶつてその縁を断ち切った……

Hピローグ

「ふう、終わった終わった。」

「見事なものだつたわよ、霧耶」

「…………疲れたけど…………時雨、家に帰つて妹さんをよく観察してろよ? ジヤ、ちょっと眠るから。」

「師匠! ?」

少年は膝をつき、隣にいる少女に支えられる。

「疲れただけよ…………さ、時雨君、言われたとおりに觀察していくあげてね」

「わかりました……じや、失礼します」

依頼主は姿を消し、残つた人たちはため息をついて立ち上がる。

「…………節佳さん、ちょっと私は外の空気を吸つてきます」

少年の親戚の少女も姿を消し、その空間に残つたのは三人となつた。

「…………焰華、私の弟子にならない? そつちのまづがさつあと強くなれるわよ?」

少年の姉は近くにいる少女にそう告げる。

「…………いえ、まだ拙者は師匠の下で励みます」

「振られちゃつたか…………じや、頼りない師匠を助けてやつてね」

少年の姉はそういうて去つていつた。

眠つている少年に少女は話しかける。

「師匠、いづれ拙者は師匠の隣に立つて見せますよ」

少女の静かな決意は眠つている少年の耳に届いただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4691d/>

縁切～エンキリ～

2010年10月8日15時55分発行